



日本の死因の第1位はがん。中でも乳がんは欧米では女性のがん死亡の第1位で、日本でも生活習慣の欧米化に伴い、急増しています。なにげなく触った時、乳房にしこりを感じたことはありませんか？

乳房を温存した摘出手術をした後に放射線をかけましょう、と言われました。でも副作用が心配です。放射線治療とはどのようなものなのでしょうか？

A 放射線治療は一般的には放射線発生装置(リニアック)から発生するエックス線によって治療します。台の上に仰向けになって、2~3分間くらいで終わる治療で痛くも熱くも無く、何も感じません。欧米ではがん患者の3人に2人が放射線治療を受けており、世界的には一般的ながんの治療法の一つで、手術、化学療法に並び、「がんの三大療法」といわれています。しかし日本では4人に1人しかうけておらず、先進国の中では遅れています。平成19年に「がん対策基本法」が公布され、そのなかで放射線治療の普及の強化がうたわれています。高齢化社会を迎え、からだにやさしいがん治療としてさらに一般的になっていくと思われます。

乳房温存療法とは？

A 約30年前まで乳がんを診断されたら、どんな早期でも乳房を切除してしまうことが一般的でした。しかし、乳房をなくすことで女性として自信がなくなり、がんは治っても生活の質が落ちてしまうことが問題視されるようになってきました。そこで腫瘍のみをくり抜き、温存した乳房に放射線治療を行う乳房温存療法が考えられました。乳房切除術と乳房温存療法の治療成績に差がないことが証明されるようになり、現在では早期乳がんの標準治療となっています。

放射線治療が本当に必要なのでしょうか？

A 腫瘍が完全に切り取られた場合(断端陰性といいます。)でも局所の再発率は20~30%と言われています。そこに放射線治療をおこなうと再発率がさらに1/3~1/4(つまり5~8%)まで下がるといわれています。また最近では生存率も改善することがわかっており、日本乳癌学会のガイドラインでも推奨グレードA(推奨される度合いが一番強い)として放射線治療を強く勧めています。

放射線治療という副作用が心配ですが？

A 放射線治療の副作用として、現れる時期によって二つに分けられます。

1 急性障害

(照射中から照射直後に現れる)

ほとんどの場合、照射した範囲に一致して発赤する皮膚炎がみられ、その後しばらく日焼けのように色素沈着がみられます。しかしこれも数カ月程度で淡くなっていきます。また軽度の全身倦怠感、発汗や皮脂分泌の低下もみられますが、ほとんどの方が気にされていないようです。

しかし、一般的な価値観からは以上の不利益(副作用)よりも利益(再発率が低下)の方が大きいと判断され、許容範囲内とされています。

2 晩期障害

(照射終了数ヵ月後~数年後に現れる)

1%以下といわれていますが咳や発熱といった症状に現れるような肺炎をきたすこともあります。また1.8%の肋骨骨折、6%の上肢浮腫、また左側乳房の場合、0.4%の心膜炎があります。

